

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

書き言葉における日本語学習者の副詞の使用実態：  
I-JASを用いて中・韓学習者を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-01-07 キーワード (Ja): キーワード (En): International Corpus of Japanese as a Second Language (I-JAS) 作成者: 島崎, 英香, SHIMAZAKI, Hideka メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00003482">https://doi.org/10.15084/00003482</a>

## 書き言葉における日本語学習者の副詞の使用実態

### — I-JAS を用いて中・韓学習者を中心に —

島崎 英香(専修大学大学院)

## Usage of Adverbs by Learners of Japanese in Written Language

### — Focusing on Chinese and Korean learners, using I-JAS —

Hideka Shimazaki (Senshu University Graduate School)

#### 要旨

本発表では『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)を用いて、中国語を母語とする日本語学習者と韓国語を母語とする日本語学習者の書き言葉における副詞の使用実態を量的に調査し日本語母語話者と比較したうえで、副詞の過剰使用、過少使用の実態を分析する。調査の結果、以下のような点を明らかにした。

- a. 日本語母語話者の副詞使用量と比較してみると、中・韓学習者ともに上級前半になると副詞の使用量が母語話者を上回っており、中・韓学習者の副詞の過剰使用の可能性が示唆された。
- b. それぞれ習熟度別に調査した結果、中級から上級前半までの中・韓学習者の過剰使用副詞には「ちょっと」「もう」「よく」「もっと」などがあり、話し言葉で使われる副詞を多用していることが認められた。一方、過少使用副詞には「メール」タスクの「大変」「よろしく」「是非」「何卒」などあった。
- c. タスクごとの副詞の使用については、日本語母語話者はタスクごとに様々な副詞を使い分けているが、中・韓学習者ともタスクごとの使い分けは顕著にみられず、副詞のバリエーションも多くはなかった。

#### 1. はじめに

日本語の副詞は話し言葉と書き言葉で文体差が大きいと言われている。石黒(2004)では、中国語母語話者が作文やレポートなど書き言葉において、漢語副詞から堅いイメージを連想し誤って漢語副詞を書き言葉に使用することが多いということが報告されている。また中俣(2019)は「学習者にとっても副詞の文体<sup>1</sup>が最も難しい」と述べ、さらに「他の品詞で適用されるルールが成り立たないのが副詞であり、学習者の混乱を生む源となっている」と述べている。このように副詞は文体によって使い分けが求められる品詞であり、学習者にとっては話し言葉と書き言葉で選択の困難な品詞であると考えられる。学習者からも副詞は話し言葉と書き言葉でどう使い分ければいいのか迷ってしまうということをよく聞く。実際に学習者のレポートを読んでみても学習者の副詞の選択には以下のように不適切

---

<sup>1</sup> 中俣(2019)では「語の文体」をある語がどのような場面、ジャンルで用いられることが多いかという情報としており、本研究でもこれに倣う。

な文が散見される。

- ・美味しいですがやり方はほんと難しいと思います。(大学1年生 中級レベル)
- ・そのまま虫を食べたら、あじをぜんぜん慣れないし、美味しくないです。  
(大学1年生 中級レベル)
- ・たくさんのゲームを体験もできますがなかなかARゲームをやったことはめっちゃ少ない  
だと思います。(大学1年生 中級レベル)

2020年に完成した『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(以下、I-JAS)は、大規模な横断学習者コーパスであることや、同じタスクを行った母語話者のデータがあり、学習者と母語話者を比較しやすいこと、学習者を習熟度別に分け、それらの習得の変化も調査できることなど様々な利点がある(迫田他:2020)。I-JASのこのような特徴を活かし、今まで客観的に把握できていなかった学習者の副詞使用の実態を知ったうえで、それを基に指導につなげていくという応用が期待できる。また、学習者が母語話者に比べ特徴的に過剰または過少に使用している副詞を特定することで、学習者の副詞の使用実態を明らかにすることができる(石川:2008、2012、2020)。

そこで本稿では、中国語を母語とする日本語学習者(以下、中国人学習者)と韓国語を母語とする日本語学習者(以下、韓国人学習者)を対象として、日本語母語話者と比較しながら、書き言葉における副詞の使用状況をI-JASを用いて分析する。まず、日本語母語話者と中国人・韓国人学習者(以下中・韓学習者)の書き言葉における副詞の使用を量的に調査した。また、高頻度に使用されている副詞を明らかにした。次に、習熟度別に中・韓学習者それぞれの副詞の使用実態を調査し、その後特徴語を抽出した。最後にタスク別における中・韓学習者の特徴語となる副詞を調査し、それぞれの「書き言葉」における副詞の使用実態を明らかにした。さらに中・韓学習者の特徴語を中心に、副詞が具体的な文脈においてどのように使用されているのか、その使用状況を質的に分析した。

## 2. 先行研究

書き言葉における副詞の先行研究について、ここでは日本語学習者の副詞選択の意識を調査したものと、学習者の副詞の使用状況を調査したものを概観する。

まず前者として、前坊(2008)は、学習者は文体によって語を使い分ける必要があること、そして、どの語が適切なのかというある程度の知識があること、しかし、その知識が必ずしも適切に使用できているわけではないことを明らかにした。さらに前坊(2009)では、レポートや論文における副詞の類似表現の選択基準に学習者は音の変化、表記、学習した時期、文章の特徴等を挙げており、さらに学習者が文体差を意識し始めるのは、作文を多く書き始める中級からと答える学習者が多いことを明らかにしている。

次に学習者の副詞の使用状況を調査したものについて述べる。まず、川口・佐々木(1996)は、学習者のオノマトペの使用が日本人と比べて少ないこと、学習者にとって呼応を持つ副詞のほうが呼応を持たない副詞の習得よりも容易であることを明らかにした。渡辺(2010)は、日本人学生と留学生の論述文に現れる副詞を調査し、その結果、程度副詞の出現が多く見られ、程度が最高であることを表す「もっとも」と「一番」についての出現率が高かったこと、加えて文体差における語彙選択については、留学生、日本人学生とも

に課題があると述べている。陳・中俣(2017)は日本語学習者コーパスを用いて程度を表す副詞「もっと」「さらに」「一番」「最も」の中国語母語話者の使用状況を調査した結果、学習者は文体差を意識することなく副詞を使用していると述べている。

さらに、朴(2020)は I-JAS を用い、口頭表現(ストーリーテリング)において中級日本語学習者の副詞がどのように産出されるかについて調査している。その結果、産出される副詞のバリエーションが少ないこと、主観を表す副詞が産出されにくいこと、初級で学んだ特定の副詞を多用する傾向があることなどを明らかにした。特に学習者にとって主観を表す副詞についての指導が必要であると述べているのは注目すべき点であると考えられる。朴(2020)では学習者の口頭表現における副詞の特徴を調査しているが、書き言葉の使用状況はどうなっているのだろうか。先にも述べたように習熟度が上がり、大学レベルになると必然的に小論文や様々な種類の課題、卒業論文などを書くことが求められるが、学習者にとっては書き言葉における副詞の選択は依然として容易ではない可能性が考えられる。

石黒(2011)が、「話し言葉と書き言葉の区別の難しさの第一は、その境界線が曖昧であること」と述べているように話し言葉の副詞と書き言葉の副詞をはっきりと区別することが難しいものもある。また副詞は文の構成上、副次的成分のひとつであり(森本:2000)、教師の側も語彙レベルの指導にとどまっていると言わざるを得ない。そのため学習者自身の判断基準は、必ずしも適切な選択を行えていない可能性がある。

そこで本稿では、書き言葉において、中・韓学習者がどのように副詞を選択しているのかを量的、質的に調査、分析し、その使用実態と問題点を探る。その結果を用いて、効果的な副詞の指導につなげることを目指したい。

### 3. 研究課題

本研究における研究課題を述べる。具体的には、I-JAS に含まれる書き言葉タスクのデータを用いて、定量的な観点から以下の3点について分析する。

- a. 中・韓学習者と日本語母語話者の書き言葉における副詞の使用量、高頻度語を比較する。
- b. 中・韓学習者の副詞の使用状況を習熟度別に調査し、その使用傾向を分析する。
- c. 中・韓学習者の副詞の使用状況をタスク別に調査し、その使用傾向を分析する。

a. から c. の分析結果から、それぞれの過剰使用・過少使用の副詞を特定し、それらの副詞が具体的な文脈においてどのように使用されているのか(あるいは使用されていないのか)という点について、質的に分析する。

## 4. 調査の概要

### 4.1 分析対象のタスク概要

以下では、分析対象データについて述べる。分析対象データには、国立国語研究所が構築した I-JAS を用いた。I-JAS には学習者 1000 名、日本語母語話者 50 名、合計 1050 名の参加者を対象として、対面調査で収集した発話や任意作文等のデータが含まれる(迫田他:2020)。

本稿では書き言葉を調査するため、I-JAS で実施された7種類のタスクのうち、4コマあ

あるいは 5 コマのコマ割り漫画を見て物語を文章化する「ストーリーライティング」(以下 SW)、3 通のメールの返信を書く「メール作文」タスク、与えられた課題に関する「エッセイ作文」タスク(迫田他:2020)を使用し分析する。以下に SW 調査に使用されたコマ割り漫画を示す。

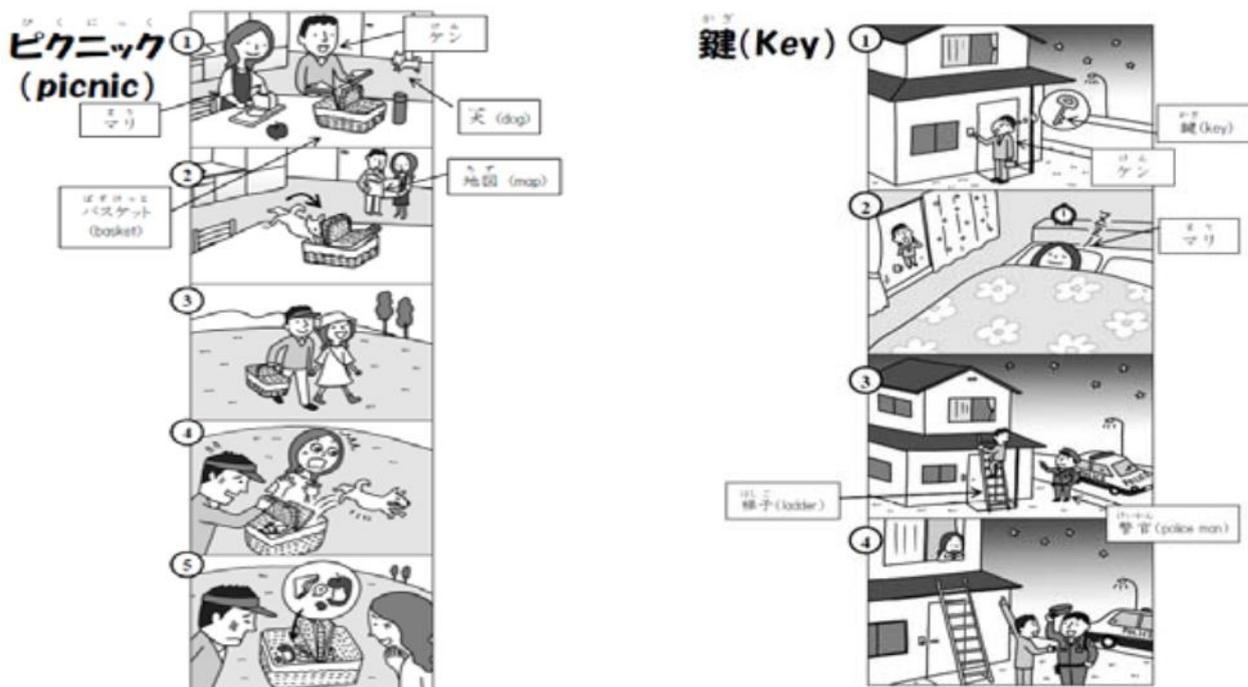


図1 ストーリーライティング1「ピクニック」 図2 ストーリーライティング2「鍵」

また I-JAS では非対面調査である任意作文調査として 2 種の作文タスクを行っており、調査に同意した参加者を対象に「メール作文」3 タスク、「エッセイ作文」1 タスクを実施している。メール作文(以下、「メール」)の内容は、(1)教師に奨学金応募のため推薦状を依頼する、(2)教師に期日までにレポートを提出できないことを伝える、(3)以前世話になった教師から自国の案内を依頼されたが、用があるため対応できないことを伝えるというものである。「エッセイ作文」(以下、「エッセイ」)は、日本の新聞社が「私たちの食生活:ファーストフードと家庭料理」というテーマで 600 字程度のエッセイを募集しており、優秀作品には賞金が与えられるという設定をした上で、文章を作成するというものである。時間制限、インターネットなどの使用の制限は行わなかったが、日本人や日本語教師に尋ねたり、助けを求めたりしないよう指示がされた(迫田他:2020)。

#### 4.2 調査対象

本研究における調査対象は、海外在住の中国語と韓国語それぞれを母語とする日本語学習者(各 100 人、いずれも海外在住者)と日本語母語話者(50 人)である。このうち中国人学習者と韓国語学習者の海外在住学習者を、J-CAT の合計スコアに基づき、中級、中級後半、

上級前半の習熟度別に分けた<sup>2</sup>。それぞれの結果から日本語母語話者と中国人学習者、韓国人学習者の副詞の使用頻度表を作成、比較、分析した。表1に分析対象データ（習熟度別に総語数、使用された副詞使用数（延べ）を挙げておく<sup>3</sup>。なお、調査対象人数については、作文調査は任意であったため、対面調査である「SW」タスクと非対面調査である「エッセイ」タスク、「メール」タスクの人数が異なっている。

表1 習熟度別の総語数と副詞使用数、対象人数<sup>4</sup>

	レベル	総語数	副詞使用数 (延べ)	エッセイ (人)	メール (人)	SW (人)	副詞使用数 (異なり)
中国人 学習者 (CCM・ CCH)	中級	23232	398	21	21	24	80
	中級 後半	32138	673	30	30	30	121
	上級 前半	25796	606	25	25	31	115
韓国人 学習者 (KKD・ KKR)	中級	5495	91	6	6	8	37
	中級 後半	27606	573	28	28	29	119
	上級 前半	38674	908	34	34	35	149
日本語母語話者 (JJJ)		45057	956	50	50	50	166

### 4.3 調査方法

データの取得方法は、中納言（バージョン 2.4.5）を使用し、I-JAS の「短単位検索」から「品詞」「大分類」で「副詞」を指定してダウンロードした。I-JAS の書き言葉の対面調査「SW」、非対面調査<sup>5</sup>「作文タスク」から日本語母語話者と中国人学習者、韓国人学習者の副詞をそれぞれ取り出した。

タスクの選択は、書き言葉を調査するため、「ストーリーライティング」、「エッセイ」、「メール」を使用した。ダウンロードした結果及び形態素解析した結果を Excel に取り込み、J-CAT の合計点に基づき習熟度別に分け、頻度表を作成し、分析した。

特徴語の調査については、石川（2020）と同様に Antconc v. 3.5.9 (Anthony, 2020) を用い、中・韓学習者と日本語母語話者を比較し、中・韓学習者が書き言葉で特徴的に使用している副詞、つまり過剰使用、過少使用をしている副詞にどのようなものがあるのかを分

<sup>2</sup> I-JAS では、全ての学習者は2種の習熟度テスト J-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test) と SPOT (Simple Performance-Oriented Test) を受けている。本研究ではこのうちの J-CAT を用い学習者を習熟度別に分けた。I-JAS のレベル判定の目安は、100 点以下が初級、中級前半が 101~150、中級が 151~200、中級後半が 201~250、上級前半が 251~300、上級が 301~350、日本語母語話者相当が 351~となっている（今井 2015p. 79）。

<sup>3</sup> 総語数を産出する際には分析に不要であると考えられる「空白」「記号」「補助記号」は除外している。

<sup>4</sup> CCM・CCH は中国人学習者、KKR・KKD は韓国人学習者、JJJ は日本語母語話者を示す。

<sup>5</sup> メール、エッセイはテキストファイルをダウンロードし、Mecab (Ver. 0.996) と UniDic (cwj-2.3.0) で解析した。

析した<sup>6</sup>。

## 5. 量的分析結果と考察

### 5.1 書き言葉における副詞の使用量

図3は、全タスクにおける中国人学習者と韓国人学習者、および日本語母語話者の副詞の使用量（1万語当たり）を調べたものである。

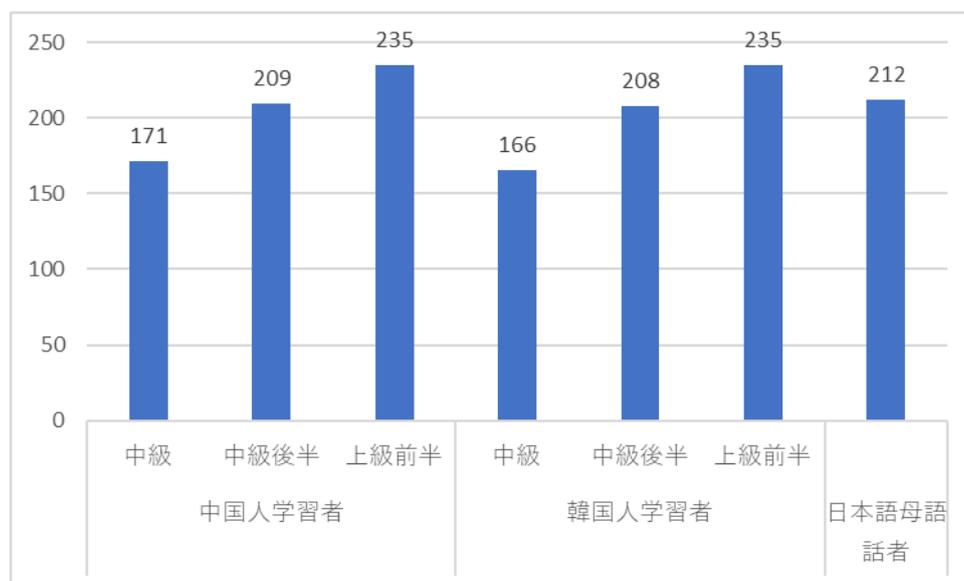


図3 中・韓学習者と日本語母語話者の1万語当たりの副詞使用数

図3を見ると、中国人学習者、韓国人学習者とも習熟度が上がるにつれて副詞の使用量も増加しているのがわかる。日本語母語話者の副詞使用量と比較してみると、中国人学習者、韓国人学習者ともに上級前半になると副詞の使用量が母語話者よりも上回っていることがわかる。島崎(2020)で示した、I-JASを用いた話し言葉の副詞の使用実態調査では母語話者の1万語当たりの副詞の使用量は565語であり、書き言葉の副詞は話し言葉の副詞の半分以下に抑えられていることがわかる。その一方で、中国人学習者、韓国人学習者の上級前半の学習者の副詞の使用数は母語話者を上回っている。このことは、副詞を過剰使用している可能性を示唆すると考えられる。

### 5.2 書き言葉における高頻度副詞

ここでは中国人学習者、韓国人学習者が書き言葉において高頻度で使用している副詞を

<sup>6</sup>集計は、石川(2020)に従って、以下の手順で実施した。まず、Antconcで副詞頻度表を作成した。次に、特徴語の抽出に使用する統計量として対数尤度比(log-likelihood)を選択した(有意水準は5%、ボンフェローニ補正有り)。「効果量」の測定には「オッズ比」が計算できるように設定した。日本語母語話者との比較は学習者の副詞使用の特徴を明らかにするために行ったものであり、日本語母語話者と同じ副詞の使用をしなければならないと考えて行うものではない。

調査する。表2 は習熟度別に見た中・韓学習者と日本語母語話者の副詞使用頻度表である。集計は書字形出現形で行った。

表2を見ると、母語話者の高頻度語には「大変」「よろしく(宜しく)」「どう」「とても」「ぜひ(是非)」などがある。中国人学習者と日本語母語話者の高頻度の上位10語までの重なりを見ると中級では「とても」「どう」「もう」「どうぞ」「よろしく」の5語で、中級後半では「どう」「もう」「よろしく」「とても」の4語、上級前半では中級後半の4語に、「大変」が加わり5語であった。また母語話者には「少し」がランキングされていたが、中国人学習者のほうはそれに代わる「ちょっと」が中級から上級前半まで高頻度で使われていることがわかる。このことから中国人学習者が一般的に口語表現で多用される副詞「ちょっと」を書き言葉でも多用している実態がうかがえる。一方、韓国学習者を見てみると日本語母語話者と中級の重なりは「もう」「よろしく」の2語のみであったが、中級後半ではそれに加えて「どう」「とても」「少し」が加わっている。上級前半の学習者との重なりをみると、さらに「ぜひ」「たいへん」「とても」が加わり母語話者と7語の重なりが見られ、韓国学習者は習熟度が上がるにつれ母語話者に近い副詞の使用状況を示していることがわかる。

表2 中・韓学習者と日本語母語話者の副詞使用上位10語(1万語当たりの調整頻度)

中国人学習者						韓国学習者						日本語母語話者	
中級		中級後半		上級前半		中級		中級後半		上級前半			
副詞	頻度	副詞	頻度	副詞	頻度	副詞	頻度	副詞	頻度	副詞	頻度	副詞	頻度
とても	15	どう	21	どう	15	よく	18	もう	14	どう	21	大変	20
どう	14	もう	14	もう	13	もう	15	もし	11	もう	13	よろしく	15
もう	10	よく	11	とても	12	ちょっと	15	どう	10	もし	11	どう	14
どうぞ	8	ちょっと	8	大変	11	もし	11	よく	9	ぜひ	8	とても	9
よく	7	よろしく	7	よろしく	9	もっと	9	とても	7	大変	7	ぜひ	7
一番	7	もっと	7	よく	8	ずっと	7	また	6	少し	7	どうぞ	6
よろしく	7	とても	7	いろいろ	7	よろしく	7	少し	6	とても	6	宜しく	5
いろいろ	7	もし	6	ちょっと	7	まず	7	まず	5	もっと	6	もう	5
ちょっと	6	いろいろ	6	せっかく	6	もちろん	5	よろしく	4	また	6	是非	5
あまり	5	一番	6	もし	6	あまり	5	直接	4	よろしく	5	少し	4

### 5.3 習熟度別の特徴語となる副詞

ここでは習熟度別に特徴語となる副詞を調査した。母語話者に比べて中国人学習者と韓国学習者が多用している特徴語である副詞と、その反対に母語話者と比べて中国人学習者、韓国学習者が使えていない過少副詞を調査した。集計方法は、石川(2020)に倣って Antconc (Ver. 3.5.9) を用いて行った。表3は、中国人学習者の習熟度別に見た特徴語となる過剰・過少副詞である。「特徴度」とは母語話者に比べて学習者のほうが顕著に多く

使用する過剰使用語、あるいは顕著に少なく使用する過少使用語であることの度合いを示す。数値が高いほどその程度が顕著であることを示す。「効果量」は 1 より大きいと学習者の当該語が生起しやすいことを、1 より小さいと生起しにくいことを示している（石川：2020）。

表3 中国人学習者の習熟度別過剰・過少副詞

	過剰使用副詞 (中国人学習者>母語話者)			過少使用副詞 (中国人学習者<母語話者)		
	語	特徴度	効果量	語	特徴度	効果量
中級	全然	+26.64	32.4515	大変	-30.92	0.1864
	一番	+22.89	9.8924			
	いろいろ	+20.93	9.2878			
	もう	+16.85	3.5263			
	ちょっと	+16.77	6.9416			
	よく	+16.52	5.635			
	とても	+13.92	2.5029			
	ずっと	+12.33	10.295			
中級後半	もっと	+12.33	10.295			
	もっと	+26.58	15.7878	大変	-38.94	0.2093
	ちょっと	+22.08	7.2304	是非	-15.85	0.0675
	よく	+18.99	5.3766			
	いろいろ	+15.87	6.7138			
上級前半	一番	+15.87	6.7138			
	もう	+26.87	3.9622			
	いろいろ	+16.04	6.7678			
	ずっと	+13.92	9.7194			
	ちょっと	+13.84	5.4085			
	よく	+12.73	4.297			
	やっ	+12.7	20.7826			

表3をみると、過少使用の副詞「大変」が中級で現れ、中級後半も「大変」「是非」があり、上級前半では消失していることがわかる。次に過剰使用されている副詞を見てみると、中級から上級前半まで過剰使用されている「ちょっと」「いろいろ」「よく」が認められ、中級で現れた「もう」が上級前半では最も過剰使用されていることがわかる。他には中級で現れ中級後半まで見られるが上級前半では見られなくなる「一番」「もっと」などがある。これらはすべて初級で学習する副詞であり、話し言葉として使用される副詞が多く見られる。

次に表4は、韓国人学習者の習熟度別に見た特徴語となる過剰・過少副詞である。

表4 韓国人学習者の習熟度別過剰・過少副詞<sup>7</sup>

	過剰使用副詞 (韓国人学習者>母語話者)			過少使用副詞 (韓国人学習者<母語話者)		
	語	特徴度	効果量	語	特徴度	効果量
中級	よく	+29.05	17.8383			
	ちょっと	+24.08	19.5077			
	もっと	+17.17	29.4444			
中級後半	もう	+27.66	4.2141	大変	-68.41	0.0357
	よく	+26.92	7.0258	よろしく	-14.58	0.3535
	もし	+21.12	3.7685			
	もっと	+14.7	10.6791			
上級前半	もっと	+25.13	13.978	大変	-29.37	0.3223
	もし	+13.93	2.8237	宜しく	-22.52	0.0482
				よろしく	-21.46	0.3277
				何卒	-13.1	0.0745

過剰使用の副詞を見てみると、中国人学習者>韓国人学習者となっており韓国人学習者の過剰使用語は中国人学習者に比べると少ない。一方、過少使用の副詞は、韓国人学習者>中国人学習者であることがわかる。韓国人学習者の過少使用語を詳しく見てみると、中級後半で「大変」「よろしく」が見られ、上級前半になると、それらに加え「宜しく」「何卒」が見られる。韓国人学習者の過少副詞の中国人学習者との重なりは、中級後半の「大変」のみである。また、中級では「よく」「ちょっと」の過剰使用が目立つが「ちょっと」は中級後半、上級前半になると見られなくなり、「よく」の過剰使用も上級前半ではなくなっていることがわかる。他には、中級から上級前半まで見られる「もっと」の出現や、中級後半で現れた「もし」が上級前半も過剰使用にとどまっていることがわかる。

#### 5.4 タスク別の特徴語となる副詞

次にタスク別に特徴的である副詞を見てみる。ここでは日本語母語話者および中国人学習者、韓国人学習者がタスクにより副詞を使い分けているかについて見てみたい。1万語あたりの副詞使用数はそれぞれ図4のとおりである。

<sup>7</sup> 過少使用語の「宜しく」「よろしく」は使用したデータ内の表記に揺れがあったため二重で登録されているが、本研究では書き言葉を調査することが目的であるため出現のままとした。

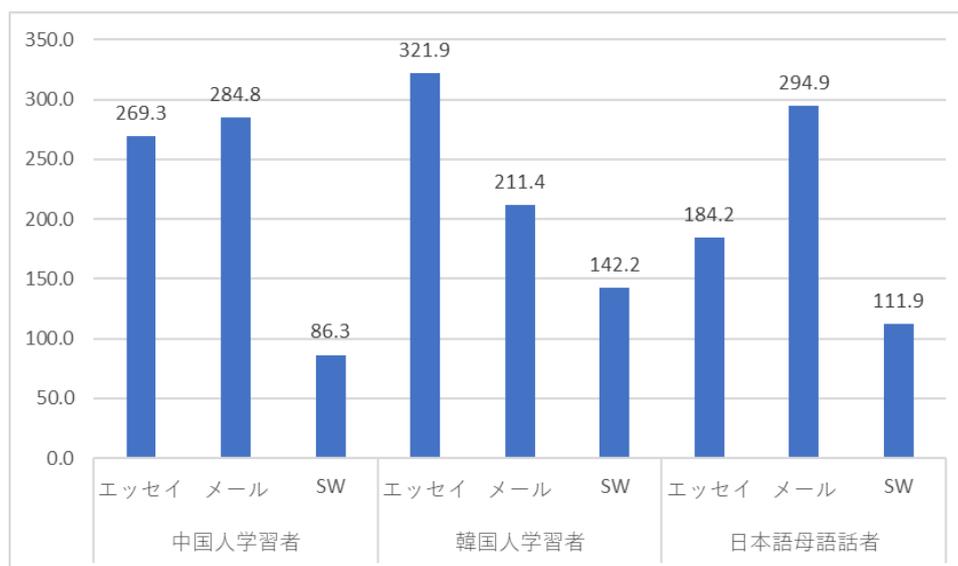


図4 タスク別1万語当たりの副詞使用数

図4を見ると日本人母語話者では最も副詞を使用しているタスクはメールであることがわかる。母語話者のメールの副詞使用数と比較すると自分の考え、意見を述べるエッセイや漫画のあらすじを描写するSWでは副詞の使用数が少ないことが明らかになった。

石黒(2015)にあるようにメールは単なる情報の伝達ではなく、人間関係が入り込む感情の伝達を含んでおり、書き手と読み手の距離によっては、ふさわしくない言語行動を選択した場合、感情の面で摩擦を引き起こす可能性がある。話し言葉ではその場での訂正ができるがメールという通信手段ではすぐに訂正ができず、摩擦はより大きくなる可能性もあるため、副詞を使用し丁寧さを強調していることが推測される。このように母語話者は目上の人へのメールでは、相手へ失礼にならないように、副詞を多用し気遣いの気持ちを表現していることが考えられ、書き言葉の中でも目上の人へのメールなどでは副詞が重要な役割を果たしていることが示唆された。

次にタスク別に副詞の出現数上位5位までを見てみた。表5から表7は、日本語母語話者、中国人学習者、韓国人学習者それぞれによる「エッセイ」、「メール」「SW」における使用副詞の出現数上位5位までを表にしたものである。

表5 エッセイの使用副詞出現数上位5位

日本	出現数 (出現率)	中国	出現数 (出現率)	韓国	出現数 (出現率)
ゆっくり	13 (4.4%)	いちばん	47 (6.8%)	よく	38 (5.5%)
どう	12 (4.0%)	よく	46 (6.7%)	まず	36 (4.9%)
すぐ そう	11 (3.7%)	とても	39 (5.7%)	もっと もちろん	32 (4.4%)
やはり とても たとえば	10 (3.3%)	もっと	35 (5.1%)	いちばん	30 (4.1%)
もちろん まず	9 (3.1%)	どう	30 (4.4%)	ゆっくり	28 (3.8%)

表6 メールの使用副詞出現数上位5位

日本	出現数 (出現率)	中国	出現数 (出現率)	韓国	出現数 (出現率)
たいへん	87 (17.1%)	どう	105 (12.8%)	どう	86 (12.7%)
よろしく	66 (16.5%)	よろしく	68 (8.3%)	ぜひ	51 (7.5%)
ぜひ	45 (9.8%)	たいへん	53 (6.5%)	もし もう	48 (7.1%)
どう	32 (8.3%)	いろいろ	52 (6.3%)	よろしく	36 (5.3%)
どうぞ	29 (5.4%)	もう	45 (5.5%)	すこし	35 (5.2%)

表7 SWの使用副詞出現数上位5位

日本	出現数 (出現率)	中国	出現数 (出現率)	韓国	出現数 (出現率)
がっかり	10 (8.5%)	もう	68 (17.3%)	もう	43 (17.7%)
ようやく すっかり	9 (7.6%)	ちょうど	36 (10.7%)	がっかり	17 (7.0%)
ぐっすり	9 (6.8%)	ずっと	21 (6.7%)	すでに	14 (5.8%)
ちょうど どう とても	8 (5.1%)	ぐっすり ようやく	4 (5.3%)	ぜんぜん	12 (4.9%)
すで そう	6 (4.2%)	どう こっそり ぜんぜん	3 (4.0%)	どう こっそり	9 (3.7%)

まず日本語母語話者のタスク別副詞の上位5位までの使用状況を見てみる。表5 エッセイの使用副詞出現数上位5位を見ると、自分の意見を論理的に叙述する「エッセイ」で日本語母語話者は、「ゆっくり」「どう」「すぐ/そう」「やはり/とても/たとえば」が上位で使われている。表6の目上の人への依頼、お願い、断りの「メール」を書くタスクでは「たいへん」「よろしく」「ぜひ」「どうぞ」などのあらたまり度<sup>8</sup>の高い副詞が上位に並んで

<sup>8</sup> 石黒(2015)では話し言葉的、書き言葉的といった一次元的なとらえ方を「硬さ/軟らかさ」という情報の伝達、目上、目下、親疎関係といった対人関係の違いを「あらたまり/くだけ」という感情の伝達、というように二次元的に捉えており、本研究でもビジネスメールや目上の人へのメールに使用される副詞はあらたまりの程度が高いと考えた。

いる。また、表 7 のコマ割りの漫画を描写する課題「SW」では「がっかり」「ようやく/すっきり」「ぐっすり」「ちょうど」のように状況を詳細に描写するための副詞が使われていることが推測できる。タスクそれぞれで重複して使用されている副詞はない。このように日本語母語話者は日本語母語話者がタスクによって副詞を使い分けていることがわかる。一方、中国人学習者と韓国人学習者の日本語母語話者との重なりは多くはなく、上位 5 位までの母語話者と中国人学習者のエッセイでの重なりは「どう」「とても」のみであり、メールでの重なりである「どう」「たいへん」「よろしく」の 3 語、SW での重なりは「ようやく」「ぐっすり」「ちょうど」であった。日本語母語話者と韓国人学習者のエッセイでの重なりは「ゆっくり」のみ、メールでの重なり「どう」「ぜひ」「よろしく」であり、SW での重なりが韓国人学習者「がっかり」「すでに」の 2 語であった。一方、中国人学習者と韓国人学習者の重なりは、エッセイの「いちばん」「よく」「もっと」の 3 語、メールの「どう」「よろしく」「もう」の 3 語、SW の「もう」「ぜんぜん」「どう」「こっそり」の 4 語であり、中国人学習者と韓国人学習者の副詞の使用傾向がやや似通っていることがわかる。

以上から、母語話者はタスクの特性によって副詞を使い分けていること、タスクが変わっても中国人学習者と韓国人学習者の副詞の選択は似通っている傾向があり、母語話者に比べるとタスク毎の使い分けができていないと言え難いということがわかった。次に表 8 は、中国人学習者のタスク別過剰・過少使用の副詞を表したものである。

表 8 中国人学習者の副詞のタスク別過剰・過少使用副詞

タスク	過剰使用副詞 (中国人学習者 > 母語話者)			過少使用副詞 (中国人学習者 < 母語話者)		
	語	特徴度	効果量	語	特徴度	効果量
エッセイ	もっと	+25.82	32.0521			
	いちばん	+16.09	5.4076			
	もっとも	+12.4	15.1505			
メール	ちょっと	+28.32	13.6704	たいへん	-37.16	0.3355
	きっと	+18.62	24.6557	よろしく	-29.94	0.378
	いろいろ	+17.81	4.1156	ぜひ	-16.37	0.4044
	よく	+5.49	20.4684	なにとぞ	-13.52	0.1632
	ちょうど	+14.48	4.7097			
SW	もう	+10.95	5.9758			

表 8 を見ると、中国人学習者では過少使用副詞は「メール」タスクの「たいへん」「よろしく」「ぜひ」「なにとぞ」が出現していた。これらはあらたまり度の高い書き言葉の場面では多用される副詞であることが推測され、指導の必要性があると言える。

次に過剰使用を見てみよう。まず、「エッセイ」タスクを見ると、「もっと」「いちばん」「もっとも」の過剰使用がわかる。「メール」タスクを見ると「ちょっと」「きっと」「いろいろ」などがあり、話し言葉で使用される副詞が上位に挙がっている。SW は「もう」のみが挙がっている。特にメールタスクの過剰・過少使用を見ると、目上の人に対するメールを書くとき副詞の使い分けができていないことが明らかになった。

次に韓国人学習者のタスク別過剰・過少使用を見てみる。

表9 韓国人学習者の副詞のタスク別過・過少剰使用副詞

タスク	過剰使用副詞 (韓国人学習者>母語話者)			過少使用副詞 (韓国人学習者<母語話者)		
	語	特徴度	効果量	語	特徴度	効果量
エッセイ	もっと	+22.36	27.3763			
メール	よく	+17.74	24.4629	たいへん	-63.44	0.1866
	もう	+14.91	3.0926	よろしく	-41.01	0.2844
				なにとぞ	-16.01	0.097
SW	もう	+17.46	6.1275	ようやく	-14.85	0.05

表9を見てみると、韓国人学習者の過少使用副詞には、SWタスクの「ようやく」が見られるものの中国人学習者と同じく「たいへん」「よろしく」「なにとぞ」が見られ傾向は似ている。次に過剰使用副詞を見てみると、中国人学習者よりもその数は少なく、タスク別に見た過剰使用副詞は、中国人学習者>韓国人学習者であることがわかる。エッセイの「もっと」、メールの「よく」「もう」、SWの「もう」が見られる。

## 6. 質的分析と考察

### 6.1 習熟度別の中国人学習者の特徴語「ちょっと」

中級から上級前半へと習熟度が上がっても中国人学習者の「ちょっと」の過剰使用は解消されていない。ここでは中国人学習者が多用している程度副詞「ちょっと」「一番」の実際の使用例を見てみる。

- (1) しかし、手料理はファーストフードより長い時間がかかりますが、ちょっと不便と  
思います (CCM07-e・中級)
- (2) サラリーマンにとってはちょっと無理です。(CCM10-e・中級後半)
- (3) ちょっとお願いしたいことがあります。(CCM03-m1・上級前半)
- (4) でも、どっちが好きでも、体によくないかどうかは一番主要なものでしょう。  
(CCH20-e・中級)
- (5) 一方的に、家庭の手作り料理は時間がかかって、その後の洗うことも面倒くさいけど、  
家族の愛を強める一番有効な方法です。(CCH17-e・上級前半)

(1)(2)のようにエッセイでも中国人学習者は「ちょっと」を多用していたが、日本人母語話者を分析してみるとほとんど使用が見られなかった。メールでは(3)のような「ちょっと」の使用が顕著にみられた。「少し」という量や程度の意味というよりもためらいの気持ち、遠慮の気持ちを表しているといえるが、(1)(2)は意見文という書き言葉であることから、「ちょっと」は不要である。(3)の使用例は友人など親しい人やSNSで使うことが

あっても、教師や上司など相手によっては、相応しいとは言えない。日本人の使用例をみてみても「メール」タスクでは(3)のような使用例はなかった。これらは、話し言葉からの転用であると推測され、文体による副詞の使い分けができていないことが明らかにわかる使用例である。

(4)(5)は、ここでは硬い書き言葉で使用され日常語ではあまり使用されない副詞「もっとも」が適当であると考えられる。表4、5の結果から、「一番」については中国人学習者>韓国人学習者>日本語母語話者の順に多用されているが、これは陳・中俣(2017)の結果と同様であった。「もっと」や「一番」は、(中俣:2019、島崎:2020)の調査結果から中国人学習者の話し言葉で過剰に使われていることがわかっており、話し言葉の書き言葉への影響がうかがえる。

## 6.2 習熟度別の韓国人学習者の特徴語「もっと」

ここでは中級から上級前半まで韓国人学習者で過剰使用となっている「もっと」の実際の使用例を見てみる。

- (6) それくらい食生活は大切なことで何を食べるのはもっと重要です。(KKR07-e・中級)
- (7) 実際に最近野菜の料理は、スーパーで材料を買って家庭で作って食べるよりサンドイッチ屋やサラダ屋で買って食べるのがもっと安くて簡単だ。(KKD05-e・上級前半)
- (8) 先生のおかげで、日本の文化や言語にもっと興味になったので、今年も日本で留学しようと決めました。(KKR35-m1・中級後半)

これらの副詞「もっと」よりも客観的な表現で使用され特定の感情を暗示しない副詞「より」が相応しいと考えられる。中国人学習者も中級後半で「もっと」の過剰使用が見られるがその他の段階では見られず、韓国人学習者の顕著な使用状況がわかる。中俣(2019)でも学習者は文体差を意識することなく「もっと」を使用していると記されている。陳・中俣(2017)でも「もっと」は「韓国人学習者>中国人学習者>日本人母語話者の順に多用される」と述べられており、ここでも同様の傾向が確認された。

## 6.3 「エッセイ」タスクにおける過剰使用語「きっと」「ちょうど」

ここでは「エッセイ」タスクにおける副詞の過剰使用語「きっと」「ちょうど」の使用例を示す。まず、エッセイの過剰使用の副詞「きっと」「ちょうど」について見てみる。「きっと」は主観的な確信を持つ副詞であり、目上の人に送るメールに含める副詞としては相応しくないと考え、メールではより客観性の強い「必ず」で言い換える方がよいと言える。

- (9) 今度機会があれば、きっとご案内いたします。(CCH26\_m3・中級)

(10) 今度先生が来る時、きっとよく招待します。(CCM08-m3・中級後半)

(11) 今度は、きっと観光のご案内をさせていただきます。(CCM33-m3・上級前半)

次に中国人学習者の「ちょうど」の使用例を見てみる。

(12) 私はちょうど別の用事があるので、先生に案内するのがどうしてもできない。  
(CCH36\_m3・中級)

(13) 先生には遊びにつれてって聞きましたが、悪いですが、ちょうどあの日、ほかの用事があります。(CCH39\_m3・中級後半)

(14) あいにくこの日にどうしても外せない別件が入ってしまっているため、本当に申し訳ないのですがその日に観光案内をお付き合いすることができません。(JJJ03-m3)

「ちょうど」はある状態に合致している様子を表すが、このような文脈では、(14)のように日本語母語話者は「ちょうど」よりも「あいにく」などの副詞を使用している。リーディングチュウ太で調べてみたところ「あいにく」はN2N3レベルとなっていて未習語彙の可能性も考えられるが、メールなどで残念な気持ちを表す時には便利な表現であり、教師もこのような間違いがあることを知ったうえで積極的にこのような主観を表す副詞を教えることは重要ではないだろうか。

#### 6.4 「メール」タスクにおける過少使用語「たいへん」

中国人学習者、韓国人学習者とも「たいへん」が過少使用となっている。中国人・韓学習者は、程度を表す副詞「たいへん」の代わりにどのような副詞を使用しているのだろうか。まず韓国人学習者を見てみる。

(15) 先生からの頼みごとをもらうなんてすごく嬉しかったです。(KKD48-m3・上級前半)

(16) すごくお世話になりましたが。。覚えますか。(KKR35-m・中級後半)

このように韓国人学習者は、嬉しい気持ちや感謝の気持ちの程度を強調するために話し言葉で使用される「すごく」を多用していた。これは習熟度が上がるにつれ顕著に見られた。それでは、中国人学習者も同じように書き言葉で「すごく」を多用しているのだろうか。中国人学習者の同じ状況における使用例を見てみた。例文は以下のとおりである。

(17) 早く出来上がるから、時間の節約ができる、サラリーマンや学生に対しては、すごく魅力がある。(CCH16\_e・上級前半)

(18) わたくしが日本に行った時に、いろいろお世話になり、本当にありがとうございます

す。

(CCH19\_m3 中級後半)

(19) ホントに申し訳ありません。(CCH20\_m3・中級)

(20) 鈴木先生はすぐ中国にいらっしゃって 研究会に参加なさることが知ったから、私は とつても喜んでおりますけど、先生がいらっしゃるの間に 友達と一緒に遊びに行きます(CCH25\_m3・中級)

(21) 本当に申し訳ございませんが、先生が楽しく遊んでください。(CCH28\_m3・中級)

(22) 帰国後、わたしもいつも先生の夢をみます、先生と一緒にいた生活を 本当に懐かしく思います！(CCH30\_m3・中級)

中国人学習者は、「すごく」の使用はわずかで、代わりに「本当に」や「とつても」を多用していた。このように韓国人学習者は、「たいへん」の代わりに話し言葉である「すごく」を多用していたが、中国人学習者は「たいへん」の代わりに「本当」「とつても」を使用しており両者の使用傾向には違いが見られた。中国人学習者は話し言葉で「とつても」を過剰に使用する傾向が見られる(島崎:2020)ことから、書き言葉に話し言葉を持ち込んでいる(遠藤:1988)ことが考えられる。ただ、「たいへん」の使い方も含め指導の必要があるものの書き言葉における「とつても」や「本当に」は「すごく」に比べると相応しくないとは言えない。また「とつても」や「ホントに」などのあらたまり度の高い場面での書き言葉の表記には問題があることから、書き言葉の表記についても改めて指導の必要性があると考えられる。

## 6.5 SW における過剰使用語「もう」

SW では副詞「もう」が中国人学習者、韓国人学習者とも過剰使用となっている。ここからは、SW における中国人学習者と韓国人学習者の「もう」の使用をしてみる。

(23) 驚いた二人はバスケットの中を見ましたけど、中の食べ物は もう 犬が全部食べてしまいました。(KKD38-SW1・中級)

(24) 前作った料理は もう 食べられてしまいました。(CCH18-SW1・中級後半)

(25) 大きな声で呼んで、でも もう 十二時になるので、マリさんは もう 寝ていました。(CCH51-SW1・上級前半)

(23)～(25)の例のように中国人学習者、韓国人学習者ともに「もう」が修飾している述語には「食べる、寝る」が多く使用されていた。一方、日本語母語話者は「もう」をどのように使用しているのだろうか。母語話者の「もう」の使用を見てみた。母語話者の「も

う」の使用は3件のみで「もう寝ていた」2件、「もう夜一二時です」という使用例であった。

(26)それもそのはず、もう夜十二時です (JJJ54-SW2)

中国人学習者、韓国人学習者が「もう」と一緒に使っていた「寝ていた」「食べられていた」を修飾する副詞を見てみると「ぐっすり」眠っていた、「すっかり」食べられていた、「すでに」マリは寝てしまっていた、などがあり、学習者が「もう」で済ませているところを、日本語母語話者は様々な副詞を使い表現していることがわかった。以下に日本語母語話者の例を示す。

(27)どうやらマリは深い眠りについてしまったようです。(JJJ05-SW2)

(28)バスケットの中身を見ると、サンドイッチはすっかり犬に食べられてしまっていました。(JJJ54-SW1)

(29)時刻はすでに十二時をまわってましたので妻のマリは熟睡中です。(JJJ33-SW2)

(30)バスケットには朝作ったサンドイッチを入れていましたが、犬が荒らしてしまい、もはや食べることのできない状態でした。(JJJ18-SW1)

(31)ケンとマリはびっくりしてバスケットの中を見ましたが、案の定二人のランチは全てきれいに食べられてしまっていました。(JJJ43-SW1)

このように日本語母語話者の使用を見ると学習者が多用している「もう」の代わりに「ようやく」「どうやら」「ぐっすり」「すっかり」「すでに」「もはや」「案の定」と様々な副詞を使って表現していることがわかる。このようなことから学習者は場面が変わっても初級で学習した副詞「もう」を多用する一方、これらの情態副詞「ぐっすり」「すっかり」や主観を表す陳述副詞「ようやく」「どうやら」「もはや」「案の定」などの副詞が使えていないことが明らかになった。

## 7. まとめと今後の課題

本稿では、I-JAS を用いて中国人学習者、韓国人学習者の書き言葉における副詞の使用実態を調査した。調査の結果から以下のことが分かった。

- a. 中国人学習者、韓国人学習者とも習熟度が上がるにつれて副詞の使用量は増加していた。一方、日本語母語話者と副詞使用量を比較してみると、中国人学習者、韓国人学習者ともに上級前半になると副詞の使用量が母語話者を上回っており、中・韓学習者の副詞の過剰使用の可能性が示唆された。
- b. 過剰使用されていた副詞は、韓国人学習者より中国人学習者の方が多く見られた。一方、過少使用されていた副詞は、中国人学習者よりも韓国人学習者の方が多く見られた。それぞれ習熟度別に調査した結果、中国人学習者は中級から上級前半まで「い

ろいろ」「ちょっと」「もう」「きっと」などの過剰使用が、韓国人学習者は中級から上級前半まで「よく」や「もっと」などの過剰使用が確認された。これらはほとんどが初級で学習する副詞であった。また過少使用される副詞には「たいへん」「よろしく」「ぜひ」「なにとぞ」があった。過少使用である「たいへん」の学習者の使用状況を見てみると、中国人学習者は、代わりに「ほんとうに」や「とても」の使用が多く見られ、韓国人学習者では「すごく」の使用が多く見られた。

- c. タスク毎の副詞の使用については、日本人母語話者は「エッセイ」タスク、「メール」タスク、「SW」タスクのうち、「メール」タスクでの副詞使用が最も多かったが、中国人学習者は、「エッセイ」と「メール」の副詞使用量が多く、韓国人学習者は、「エッセイ」の副詞使用量が多くなっていた。日本語母語話者はタスクごとに様々な副詞を使い分けているが、中国人学習者、韓国人学習者ともタスクごとの使い分けは顕著にみられず、副詞のバリエーションも少なかった。中国人学習者の過剰使用されていた副詞には「エッセイ」では「もっと」「いちばん」「もともと」があり、「メール」では「ちょっと」「きっと」「いろいろ」「よく」「ちょうど」が見られ、「SW」では「もう」が見られた。一方、韓国人学習者の過剰使用されていた副詞には、「エッセイ」から「もっと」、「メール」からは「よく」「もう」が、「SW」からは「もう」が見られた。過少使用されていた副詞は中国人学習者、韓国人学習者とも「メール」タスクのみであり「たいへん」「よろしく」「なにとぞ」などが見られた。これらの結果から中国人学習者と韓国人学習者は初級で学習する副詞をタスクに関わらず繰り返し使用していることが推測された。

中国人学習者、韓国人学習者とも日本語母語話者と比較して過剰使用、過少使用をしている副詞が認められた。過少使用をしている副詞については、主にビジネスメールで使われる「たいへん」「どうぞ」「よろしく」「なにとぞ」などのあらたまり度が高い副詞があまり使用されていないことがわかった。中国人学習者は「メール」では「たいへん」の代わりに「本当に」「とても」を使用し、韓国人学習者は「すごく」を使用する傾向が明らかになった。これらの副詞については、教師が使用場面の違いを意識して示すことが必要だと考えられる。その際は学習者が過剰、過少使用する可能性を理解したうえで、なぜその副詞を使用するのかも含めて学習者に示すことが重要であると考えられる。日本語母語話者の副詞使用はメールの副詞使用に比べると、エッセイやSWでは副詞の使用量は抑えられていた。石黒（2009）も述べているように「書き言葉の特徴は可能な限り虚飾を排して事態を正確に記述する」ことにある。副詞のような副次的な品詞は、使用しなくても意味は理解されるので、日本語母語話者はエッセイやSWでは副詞を多用していないが、目上の人へのメールは書き言葉であっても副詞を駆使し相手への配慮を表現していることが推測できる。このことから母語話者は、メールにおいては書き言葉であっても相手によっては、読み手への待遇的な配慮のために副詞を多用していることが示唆された。

過剰使用の副詞については、朴（2020）が行った口頭表現についての副詞と同様に、書き言葉においても、同じような結果が得られた。すなわち、学習者は初級で学習した副詞を上級になっても多用しており、「ちょっと」「いろいろ」「もっと」「きっと」などのように書き言葉には相応しくない副詞を使用していること、また初級で習った「もう」を多用し、上級になっても主観を表す副詞「ようやく」「やっと」や情態副詞「がっかり」「すっかり」「ぐっすり」などの副詞が使用できておらずバリエーションが少ないことが明らかになっ

た。また学習者の使用例からは、書き言葉であることや目上の人へのメールであることなどから「ホントに」や「とっても」などの表記の問題を含んでいることも明らかになった。

本研究では、I-JAS を用いて書き言葉であるエッセイ、メール、SW の学習者の副詞の使用実態を調査したが、今後は調査対象をでき得る限り他のトピックにも広げ、書き言葉におけるトピック毎の副詞の使用実態を調査し、場面によって副詞の使用に違いがあるのかを調査したいと考えている。さらに学習者が使用している書き言葉と話し言葉を日本語母語話者と比較し、その相違や文体への影響を調査していきたいと考えている。

## 謝 辞

指導教官である専修大学教授丸山岳彦先生には、終始温かいご指導、ご助言をいただきましたこと、心から感謝申し上げます。

## 文 献

- ・今井新悟(2015)「J-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test)」李在鎬(編)『日本語教育のための言語テストガイドブック』67-85、くろしお出版
- ・石川慎一郎(2008)『英語コーパスと言語教育—データとしてのテキスト』大修館書店
- ・石川慎一郎(2012)『ベーシックコーパス言語学』ひつじ書房
- ・石川慎一郎(2020)「発話における副詞の使用」『日本語学習者コーパス I-JAS 入門』くろしお出版 167-184
- ・石黒圭(2004)「中国語母語話者の作文に見られる漢語副詞の使い方の特徴」『一橋大学留学生センター紀要』7 3-13、一橋大学留学生センター
- ・石黒圭(2009)『よくわかる文章表現の技術 I—表現・表記編— [新版]』明治書院
- ・石黒圭(2011)「話し言葉と書き言葉 - 初年次教育の基礎資料として - 」『言語文』48, 15-35
- ・石黒圭(2015)「話し言葉と書き言葉」と「硬さ／軟らかさ」『日本語学』34(1)、14-25
- ・遠藤織枝(1988)「話し言葉と書き言葉—その使い分けの基準を考える—」『日本語学』7 巻3号 27-42
- ・川口良・佐々木泰子(1996)「日本人と日本語学習者の作文における副詞の発達過程に関する研究」『お茶の水女子大学人文科学紀要』49、 219-238
- ・島崎英香(2020)「中国語を母語とする日本語学習者の話し言葉における副詞の使用傾向：I-JAS を用いて習熟度別に」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』(5), 20-32
- ・陳建明・中俣尚己(2017)「程度を表す副詞の日中対照と日本語学習者コーパスの分析—話し言葉と書き言葉の違いに注目して—」『中国語話者のための日本語教育文法を求めて』95-124 日中言語文化出版社
- ・中俣尚己(2019)「日本語学習者を悩ませる文体の問題」『文体論研究』第65号 119-134
- ・迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬編(2020)『日本語学習者コーパス I-JAS 入門』くろしお出版
- ・永岡悦子(2009)「日本語教科書における論文・レポートの文体の指導項目—中上級日本語教科書の比較から—」『流通経済大学社会学部論叢』20(1) 33-45
- ・朴秀娟(2020)「中級日本語学習者の口頭表現に見られる副詞の特徴—ストーリーテリングを中心に—」『日本語/日本語教育研究』[11] 19-34

- ・ 飛田良文・浅田秀子 (1996) 『現代副詞用法事典』東京堂出版
- ・ 前坊香菜子 (2008) 「レポートを書くときに学習者はどのように語を選択するのか-副詞を中心として-」『日本語教育方法研究会誌』15 (1)、16-17
- ・ 前坊香菜子 (2009) 「語の文体的特徴に関して学習者はどのように認識しているか-類義語の副詞に対する調査から-」『日本語教育方法研究会誌』16 (1)、14-15
- ・ 森本順子(1994) 『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版
- ・ 森本順子(2000) 「副詞の現在」『日本語学』19(5) 120-129 明治書院
- ・ 李 在鎬・小林 典子・酒井たか子・迫田久美子(2015) 「テスト分析に基づく「SPOT」と「J-CAT」の比較」『第二言語としての日本語の習得研究』18、53-69
- ・ 渡辺 史央(2010) 「論述文に現れた副詞の分析-留学生と日本人学生の作文より-」『京都産業大学論集 人文科学系列』(41)、77-92

#### 関連 Web サイト等

- ・ 中納言 2.4.5 データバージョン 2020.05  
『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)  
(最終アクセス: 2021年8月3日)
- ・ Antconc v.3.5.9 (2020) <https://www.laurenceanthony.net/software/antconc/>
- ・ 日本語読解学習支援システムリーディングチュウ太  
<https://chuta.cegloc.tsukuba.ac.jp/>